

2019 年度

国 語  
(3期)

(答はすべて解答用紙に記入すること)

(時 間 45分)

番 号		氏 名	
--------	--	--------	--

〔一〕 次の「もの見え方と見方」についての文章A・Bを読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

A 人間は五感(視覚<sup>a</sup>・聴覚<sup>b</sup>・嗅覚<sup>c</sup>・味覚<sup>d</sup>・触覚<sup>e</sup>)を通してものを認識し、情報を収集するのですが、情報収集の七割以上は視覚を通して行われるというデータがあるくらい、五感の中でも特に重要なのは視覚です。私たちにとって「見えるもの」は絶対的ですからあります。だから「I」(Seeing is Believing.)と云われるのです。

ところで、私たちにとって「ものが見える」ということは、観念的ではなく、科学的にどうということなのでしょう。

あまりにもあたりまえのことですので、ほとんどの人は深く考えたことがないでしょう。たまには、このような「あたりまえのこと」を深く考えてみるのもよいことです。

何でもいいですから、目の前にある物体、たとえば時計を見てください。

あなたの目に、時計が見えます。

物体に光(注)包括的にいえば「電磁波」があたりますと、その一部は物体に吸収され、一部は透過し、そして一部は反射します。物体から反射された光のうち、「可視光」と呼ばれる私たちに見える光(いわゆる「虹の七色」の赤色から紫色の光)だけが私たちの網膜の感覚細胞、視神経を刺激し、その刺激を大脳が認識することで、物体が「見える」のです。

物体には可視光以外の光もあたってはいますが、反射もされているのですが、可視光以外の光は私たちの網膜の感覚細胞、視神経を刺激しませんので「見えない」のです。この可視光の範囲は、私たちの身の回りに飛び交っている全電磁波の中では非常に狭い範囲です。

つまり、観念的な意味ではなくて、純粹に物理的・科学的な見地からいって、私たちに「見える」世界は、全宇宙の中の、ほんの一部にすぎないということなのです。私たちの周囲には、「見えない」世界がたくさんある、ということなのです。

また、私たちに「見えるはず」の世界の中であっても、実際に「見える」世界はさらに狭まります。

たとえば、私たちの肉眼にはどれだけ小さなものまで見えるのでしょうか。

私は強度の乱視の上に強度の近視ですので、いずれにせよメガネのお世話になっての話ですが、認識できるのはせいぜい一〇〇〇分の一ミリメートルくらいでしょう。特殊技能を持つ名人級の職人であれば、もっと小さなものまで見えるでしょうが、いずれにせよ、人間の肉眼で見えるもの

の大きさはたかが知れています。

同様に、私たちに見える遠くのものにも限界があります。

人間は顕微鏡や望遠鏡という道具で、このような限界を拡げて来たわけですが、いずれにせよ、私たちの主な情報収集手段、認識手段として頼りにする視覚ではありますが、どのように頑張っても、私たちに「見える」のは、この宇宙の中のほんの一部の世界にすぎない、ということなのです。「見える」ということを過信してはいけません。

いま述べましたのは、「視覚」のことですが、ほかの「四感」についてもまったく同じことがいえます。

つまり、私たちが五感を通して認識できるのは、この宇宙の中のほんの一部の世界にすぎない、ということなのです。

## B

普通、私たちは、目に「見える」ものは絶対的だと思います。何といっても、実際に目に「見えている」のですから、それは動かしようがない「事実」だと思うのは当然です。

したがって、私たちが視覚に頼る (Seeing is believing) のは仕方がないのですが、そこに大きな落とし穴があるのです。すでに何度も述べましたように、私たちの視覚には、そして、ほかの「四感」にも、明確な限界があるのです。

私も愛読者の一人ですが、サン＝テグジュペリの世界的なベストセラーに『星の王子さま』という「おとなのための童話」があります。「おとなの人は、むかし、いちどは子どもだったのだから、わたしは、その子どもに、この本を捧げたいと思う。おとなは、だれも、はじめは子どもだった(しかし、そのことを忘れずにいるおとなは、いくらもない)。」という「まえがき」から私はサン＝テグジュペリに引き込まれてしまいました。この本の中で、王子さまと仲よしになったキツネが、王子さまへ「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ。」という言葉贈ります。私は、この場面を読んだ時、このキツネはなんて賢いんだろうと思いました。

古代ギリシャは数々の哲人、賢人を輩出しましたが、中でも傑出しているのが「原子論」で有名なデモクリトスです。

デモクリトスは、視覚とらえられるものは有力な情報だけに過信しがちであり、思考の妨げになる、といって、自分で自分の目をつぶしてしまったそうです。また、古代ローマの哲学者・セネカも、「私は、人間の評価に肉眼の目を信じない。私が持っているのはもつと立派な、もつと確実な眼光であり、私は、その眼光によって本物と偽物を見分けることができる」というようなことをいっています。さらに、日本の能にも「も

のは胸で見ろ、目で見ろな」という教えがあります。

目に「見える」ようなものはないです。肝心かんじんなものは目に見えないのです。

五感で「みえる」ものは、基本的に誰にでも見えるものです。誰にでも簡単には「みえないもの」を「みる」かどうか、「みえる」かどうか、が創造的人生的分かれ目です。

五感で「みえないもの」を「みる」にはどうしたらよいのでしょうか。

五感で「みえないもの」を「みる」のが、第六感あるいは「心の眼」です。いい方を変えますと、ものの本質は「心の眼」でなければ「みえない」ので

す。  
ところが、困ったことに、そのような「心の眼」は簡単に得られるようなものではないです。もちろん、お金で買えるようなものでもありません。自分自身でつくり上げて行くほかはありません。結局、そのような「心の眼」を自分自身でつくり上げて行く過程が、さまざまなものや学ぶということ、究極的には「考える智慧」を身につけることです。

(注) 包括的……ひつくるめて一つにするさま。  
(志村史夫著『文系? 理系? 人生を豊かにするヒント』より一部改変)

問一 ——線 a 「視覚」 ——線 e 「触覚」の感覚が用いられている例はどれですか。次の中からふさわしいものをそれぞれ一つずつ選び、記

号で答えなさい。

ア ふと後ろに誰かがいるような気がした。

イ 猫の背中をなでてみると、とてもふわふわしていた。

ウ 母の使っている香水は、とてもいい香りだった。

エ 昨日の出来事を思い出すと、恥ずかしくてしかなかった。

オ 今日に向こうの山がいつもより青い。

カ 急に大声で呼ばれてびっくりする。

キ このジュースはすこし甘い。

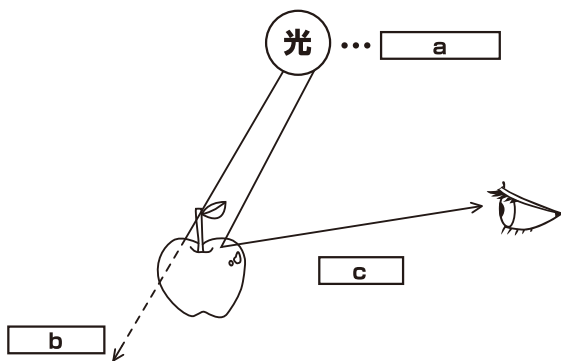
問二 文章[A]の I には、どのようなことわざが入りますか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 光陰矢のごとし  
イ 木を見て森を見ず  
ウ 百聞は一見に如かず

- エ 嘘から出たまこと  
オ 井の中の蛙大海を知らず

問三 次の図は、人間がものを見る仕組みをあらわしたものです。 [a] には「光」を言いかえた言葉が入ります。 [b] [c] には物体に当たっ

た「光」の動きをあらわす言葉が入ります。それぞれ本文からぬき出し、答えなさい。



問四 — 線①「可視光」をふくむものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 放射能                    イ 電波                    ウ 赤外線                    エ 紫外線<sup>しがいせん</sup>                    オ 太陽光

問五 — 線②「私たちに見える<sup>ゞ</sup>のは、この宇宙の中のほんの一部の世界にすぎない」とありますが、なぜそう言えるのですか。文章[A]の内容をふまえて説明しなさい。

問六 — 線③「大きな落とし穴がある」とありますが、これはどういうことか説明しなさい。

問七 — 線④「日本の能にも「ものは胸で見ろ、目で見ろ」という教えがあります」とありますが、「日本の能」には、これと関連して「もっとも大切なことは、あえて隠<sup>かく</sup>しておくのがよい」という教えがあります。そのことを表現した言葉は何でしょうか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 初心忘るべからず                    イ 秘すれば花なり                    ウ 一期一会<sup>いちごいちえ</sup>  
エ 柔能く剛<sup>こう</sup>を制す                    オ 沈黙<sup>ちんもく</sup>は金なり

問八 文章[B]で筆者が主張しているのはどういうことですか。説明しなさい。

問九 本文[A]と[B]にそれぞれ見出しをつけるとしたら、どれがよいですか。次の中からもっともふさわしいものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 見えない<sup>ゞ</sup>からこそ大切なこと                    イ 私たちの<sup>ゞ</sup>世界<sup>ゞ</sup>                    ウ 昔の人の教えと<sup>ゞ</sup>見える<sup>ゞ</sup>について  
エ <sup>ゞ</sup>ものが見える<sup>ゞ</sup>ということ                    オ 人間のからだの<sup>ゞ</sup>限界<sup>ゞ</sup>と<sup>ゞ</sup>未来<sup>ゞ</sup>

(二)

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

彼女と姉の通う洲崎<sup>X</sup>バレエ教室は三条通室町西入る衣棚町<sup>Y</sup>にあつて、三条通に面した四階建の古風なビルであつた。彼女たちは土曜日になると、ノートルダム女子大学の裏手にある白壁に蔦<sup>Z</sup>のからまった自宅から母親に送り出され、地下鉄に揺られて街中の教室へ通つてきた。

地下鉄烏丸御池駅からバレエ教室までの道のりは難しいものではなかつた。三条烏丸の南西に聳<sup>ゆび</sup>えたつ煉瓦造りの銀行の角を曲がつて、三条通をまっすぐに進んでいけば、やがて左手に目指すビルが見えてくる。

迷うはずもない一本道であるにもかかわらず、彼女①は用心深く、姉にびつたりと寄り添<sup>そ</sup>つて歩いた。繰り返し辿るその道を、彼女は「ここで右へ曲がる」というように、自分の身の振り方として覚えこもうとする癖<sup>くせ</sup>があつた。姉が少しでも違<sup>ちが</sup>う動きをすると、彼女は不安になつてしまう。通い慣れているはずの場所が、ふいに見知らぬ場所のように見えてくるからだ。

「そこ、掴<sup>つか</sup>まんといつて。歩きにくい」

「だって怖いもん」

彼女は小学校の三年生、姉は四年生になる。

ショーウィンドウにふと引き寄せられたりする姉の足取りは、まるで上品な猫<sup>ねこ</sup>のように気まぐれである。母親や先生から寄り道を禁じられているのに、姉はふいに本屋で雑誌を買いたいとか、花屋を覗<sup>のぞ</sup>きたいとか言いだして、事なかれ主義の妹をはらはらさせた。姉は好奇心のおもむくまま走りまわるのに忙<sup>いそ</sup>しく、妹は姉を気づかうのに忙<sup>いそ</sup>しかった。たがいを紐<sup>ひも</sup>で結<sup>む</sup>わえて引つぱり合うかのように、彼女たちは絶えず二人でくるくる動<sup>うご</sup>きまわつていた。

地下鉄を降りて道を辿つていくときはいつも胸がざわざわと波立っているが、バレエ教室のあるビルの重々しい玄関<sup>げんかん</sup>が見えてくると彼女は物思いに耽<sup>かか</sup>り始めて、さまざま不安はスワツと消えた。通いだした頃から、そのビルはまるで中世の小さな城のようだと思つてきた。深<sup>か</sup>緑色で古風な意匠<sup>いしやう</sup>の電燈<sup>でんとう</sup>が玄関脇<sup>わき</sup>にあるのも美しかったし、正面の扉<sup>かど</sup>まで短い階段がついているのも上品に思われたし、壁面<sup>へきめん</sup>に点々とある縦長の窓も好きだつた。彼女は表玄関に立つたばに、一番上にある窓からお姫様<sup>ひめさま</sup>が身を乗りだし、真つ白で大きな鳥が次々と舞<sup>ま</sup>い降りてくる情景を思い描<sup>えが</sup>いた。

彼女たちの母親は結婚する前、このビルの事務所で働いていたことがある。彼女はよく、若い父と母がこのビルで出会う場面を想像した。窓か

ら身を乗りだすお姫様は、写真で見たことがある若い頃の母の姿に置き換わる。たまたま通りかかった若い父が、三条通から母を見上げて一目惚れするのだ。これはまるで映画みたいだ！と彼女は嬉しく思っていたが、そもそも彼女が映画のように想像しているにすぎない。「お見合いよりはこっちのほうがいい」と彼女は決めつけていた。

扉を開いて中に入ると、ひんやりとした空気が彼女を包んだ。赤い絨毯の敷かれたロビーはがらんとしている。正面には額縁に入った不思議な絵がかかっている。たくさんの提灯が輝く路地を描いた絵で、路地の奥には赤い浴衣を着た小さな女の子が一人である。夕闇の色がなんとなく物淋しい気持ちにさせるので、彼女はこの絵が好きではなかった。

ロビーの隅から階段で三階まで上がると、洲崎バレエ教室がある。

洲崎先生は、彼女たちの母親よりも祖母に近い年齢のはずだが、若々しく、優雅だった。板張りの床に立って生徒の動きを見守るときはまるで彫像のように見えた。先生は生徒の品のない振るまいには、ことのほか厳しかった。先生が機嫌を悪くすると、その怒りの中枢から延びた鉄の糸が教室の隅々まで張り巡らされているようで、息が詰まった。そんな時は、助手の先生たちも生徒と同じように戦々恐々とした。

そわそわと浮き足立つ友人たちが口にするのは、宵山のことであった。練習が終わったら、浴衣を着て出かけると語る友人もあった。姉はしきりに羨ましがった。

その日、烏丸御池の駅で電車を降りる時、同じように降りていく乗客が「宵山」と口にするのは彼女も聞いた。街を歩く人がいつもよりも多かつたし、烏丸通には露店が並んでいるのも目にした。三条通を歩いているとき、南へ延びる室町通を覗くと、ビルや駐車場が雑然と並ぶ狭い通りにも露店が賑やかにひしめいていて、その行列の向こうに、たくさんの提灯をぶら下げた「黒主山」が見えていた。着替えが済んで練習が始まった。彼女はときおり、その景色のことを考えた。そして、ロビーにかかっている絵はあれを描いたものなのだ、とようやく気づいた。

バーレッスンから柔軟へうつりながら、助手の岬先生もぼんやりしていることに彼女は気づいた。その先生は普段から口数が少なかったが、今日はいっそう無口である。岬先生のボンヤリもまた宵山が理由に決まっていると彼女は考えた。みんなで浮き足立っている宵山というのはなんだろう。彼女は曇硝子の向こうに耳を澄ませ、いま街を浸そうとしているざわめきを聞き取ろうとした。

洲崎先生の指導でフロアレッスンが始まってから、今日は先生のご機嫌が悪いらしいと分かったので、浮かれがちだった生徒たちも神妙にレッ



スに励んだ。蛍光灯の明かりに輝く板張りの床は、彼女たちが脚を動かすたびにキツキツと微かな音を立てた。街中にあるにもかかわらず教室の中はひっそりとして、足音と息づかいが大きく響いた。

この頃、ようやく動きがバレエらしくなってきた。彼女は初めて楽しいと思うようになっていた。先生に叱られるのはもちろん嬉しいはずもないし、涙が滲むこともしばしばだが、それでも自分の身体が思ったように動いた時には嬉しかった。ただ、彼女は肝心なところで自信を失ってしまふことが多く、そのために損をしていると言われた。姉はまったく物怖じしないので、ずっと堂に入っただけを見た。

休憩時間になり、彼女はトイレに行きたくなった。

トイレは教室から外へ出た長い廊下のある。この三階にはバレエ教室のほかにも部屋があるが、扉に埋めこまれた曇硝子の向こうはいつも暗くて、なんとなく不気味に感じられた。彼女は姉についてきて貰うことにした。そういうとき、姉はいつも気軽についてきてくれ、意地悪を言ったりすることはなかった。

彼女がトイレから出てくると、姉は廊下の突き当たりにある階段を覗いていた。

「お姉ちゃん、どうしたん？」

「しっしっ」

姉は唇に指を当てて、にっこりした。「見てみ」

上階へ続いていく階段の両脇にはたくさんの提灯が並んでいた。「なんでこんなにたくさんちようちんがあるの？」と眩きながら、すでに姉の足は階段にかかっている。彼女は姉に連れられて屋上に忍び込んだときのことを思い出した。あのときは階段から下りてくるところを洲崎先生に見つかってひどく叱られた。

「駄目やつて」と彼女は姉に声を掛けた。⑩「ちよつとだけ」と姉は言った。

階段の踊り場には大きな狸の置物や招き猫が置いてあるのが見える。姉は踊り場からさらに上へ続く階段を覗き、「へえ」と声を上げている。「お雛さんがある」

「お雛さんがあるの？」

「ある。すごい大きい」

⑪「ちよつと見る」

彼女は階段を上っていき、姉の傍らに立った。同じように両脇に提灯を並べた階段を雛段に見立て、ずらりと雛人形が並んでいるのだった。姉は雛人形を蹴飛ばさないようにひらひらと舞うようにして階段を上っていき、四階の廊下に立った。「すごい」と呟いている。「へんてこなもんばっかり」

「そんなにへんてこ？」

「へんてこへんてこ」

そう言われると見たくなってしまう。彼女も後に続いた。

四階の廊下には段ボールに入った人形や玩具がたくさん置かれて、雑然としていた。姉は床に散らばっている七色のテープをつまみ上げた。縦長の窓から差しこむ光できらきらと輝く。姉はテープをひらひらさせて歩き、床に並んでいる黒や白の招き猫の頭を撫でたりした。

「おもちゃ屋さんみたい」と彼女は呟いた。

「うん」と姉が頷いた。

やがて彼女たちは赤い布のかかった大きな箱を見つけた。姉が耳をつけて、「なんだか音がする」と言う。赤い布をめくり上げたとき、彼女は暗い水の中でぎよろりとした目玉が動くのを見た。小さく悲鳴を上げて後ずさりした。姉の手を掴んだ。姉も彼女の手を掴み返した。

水槽の中には、まるで妖怪のような赤くてぶくぶくした魚が浮かんでいた。大きさは西瓜ほどもあり、まるまると太っていた。あぶあぶと口を動かしながら、彼女たちをばかんと見つめている。

二人が立ちすくんで魚を見つめていると、「こら！」と廊下の奥から声がした。麦わら帽子をかぶった女の人が立って睨んでいる。「いたずらしたら、宵山様に食べられちゃうぞ！」

彼女たちは慌てて逃げだした。

階段を下りながら姉は笑った。「ああびつくりした！」

(注) 意匠……デザイン。

問一 — 線①「彼女は用心深く」とありますが、本文には他にも「彼女」の性格をあらわす言葉があります。五字以上七字以内でぬき出し、答えなさい。

問二 — 線②「たがいを紐で結わえて引っ張り合うかのように、彼女たちは絶えず二人でくるくる動きまわっていた」とは、姉妹のどのような様子をあらわしていますか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 姉はきまぐれで自分の動きたいように動くが、妹は用心深く、いつもの行動を変えない様子。

イ 姉妹が離れてしまうことがないまま、姉は動きたい方へ、妹はそれを引き留めようとしている様子。

ウ 妹が引っ込み思案であるのに対し、姉はそういう妹を自分の行動に合うように引っ張る様子。

エ 姉妹はお互いが違った性格をしているため、それぞれ自分の思うように勝手にふるまっている様子。

オ 姉はバレエ教室までの道に慣れているのに対し、妹はまだ慣れていないため、違ったふるまいになる様子。

問三 — 線③「いつも胸がざわざわと波立っている」とありますが、この気持ちにふくまれないものはどれですか。次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア くよくよする気持ち。          イ ひやひやする気持ち。          ウ はらはらする気持ち。

エ そわそわする気持ち。          オ びくびくする気持ち。

問四——線④「お見合いよりはこっちのほうがいい」とありますが、これは「彼女」のどのような思いから出た言葉だと考えられますか。次の

中からもっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 彼女の母親はおそらく、結婚する前にこのビルの事務所で働いていたときに父親と出会い、結婚した。そのことを聞いていた彼女は、自分も将来見合い結婚でなく、両親のような恋愛結婚がしたいと思っている。

イ 彼女の両親が職場で知り合って結婚した場所が、たまたま中世の小さな城のようなすてきな建物で、彼女はそのことにとってもあこがれを感じていた。だから、その建物の前で、自分も両親のように恋愛結婚がしたいと思っている。

ウ 彼女の母親は父親とおそらく見合い結婚をしていて、彼女には恋愛結婚でなくても今は幸せであることを語っていた。しかし彼女は結婚するならだんぜん恋愛結婚がいいと勝手に思っている。

エ 彼女にとって両親がどうやって知り合って結婚したかはどうでもよく、自分が将来結婚するのだったら、見合い結婚よりもだんぜんこのような恋愛結婚のほうがロマンチックでいい、と勝手に思っている。

オ 両親はおそらく見合い結婚で、彼女はそのことを聞いていた。だから、彼女の想像するような出会いの末に結婚したのだったら、見合い結婚よりもロマンチックでよっぽどよかったのに残念だ、と勝手に思っている。

問五——線⑤「先生が機嫌を悪くすると、その怒りの中枢から延びた鉄の糸が教室の隅々まで張り巡らされているようで、息が詰まった」とあ

りますが、これは教室のどのような雰囲気であらわしていますか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先生の機嫌がこれ以上悪くならないように、教室のみんなが有無を言わず努力させられる息苦しい雰囲気。

イ 教室のなかでほんの少しでもミスをしようものなら、ただちに怒られてしまうような張り詰めた雰囲気。

ウ 先生の集中力が高まることで、教室内のみんながどんなささいなことでも気になってしまうような神経質な雰囲気。

エ 教室のなかでは先生も助手も、みんなが一緒になって生徒の動きを監視し合うものものしい雰囲気。

オ 先生が怒りの矛先を求め、だれに雷を落とそうかと辺りを静かにうかがっている緊張感のある雰囲気。

問六——線⑥「あれ」は何を指していますか。本文から一語でぬき出し、答えなさい。

問七——線⑦「岬先生のボンヤリもまた宵山が理由に決まっていると彼女は考えた」とありますが、なぜそう考えたのですか。次の中からもつともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 彼女のなかで宵山が、人々をいつもと違う気持ちにさせるものだと思いき始めてきたから。

イ 宵山のもの珍しさが岬先生の心をとらえ、ふわふわした気持ちにさせているに違いないと考えたから。

ウ 街が浮かれているからこそ洲崎先生は苛立ち、岬先生はそのために怒られ、気持ちが沈んでいると考えたから。

エ 街を歩く人が多くなつたことで、岬先生は教室にやってきただけで疲れてしまったのだろうと考えたから。

オ 岬先生は集中できていない子どもたちを見て、きつと洲崎先生は怒るだろうと気が気でなくなっていると考えたから。

問八——⑧「物怖じしない」、⑨「堂に入(る)」とはどういう意味ですか。次の中からふさわしいものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア キレがある

イ さまになる

ウ 楽しくなる

エ 堂々としている

オ 不満がない

問九——線⑩「ちよつとだけ」と姉は言った」とありますが、このような「姉」の心持ちをあらわす語を漢字五字以内で本文からぬき出し、答えなさい。

問十 — 線①「ちょっと見る」と言ったときの気持ちは、どのようなものだと考えられますか。次の中からふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア たくさんの提灯が並ぶ階段を不気味に感じた気持ちよりも、狸の置物や招き猫、雛人形を見て気持ちが落ち着いたことで、見たい気持ちの方が勝っている。

イ トイレから出ると姉がいなかった驚きよりも、お祭りのような廊下の怪しい様子から、何が起こっているのかをいそいで確かめたい気持ちの方が勝っている。

ウ 洲崎先生に怒られたことを思い出してはやくこの場所から去りたい気持ちよりも、大きな雛人形があると言われたことで、見たい気持ちの方が勝っている。

エ 姉の行動にひやひやして動きたくない気持ちよりも、雛人形に興味が移り、その大きさと変わった形を知りたい気持ちが勝っている。  
オ 勝手にどンドン動いていく姉にいらした気持ちよりも、面白そうな雛人形があることを教えてくれたことで、許す気持ちが勝っている。

問十一 — 線②「小さく悲鳴を上げて後ずさりした」とありますが、このときの気持ちはどのようなものと考えられますか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 赤い布のかかった箱を開いてみたら、この世のものとは思えない大きな赤い魚と目が合ってしまった、あつけにとられた。

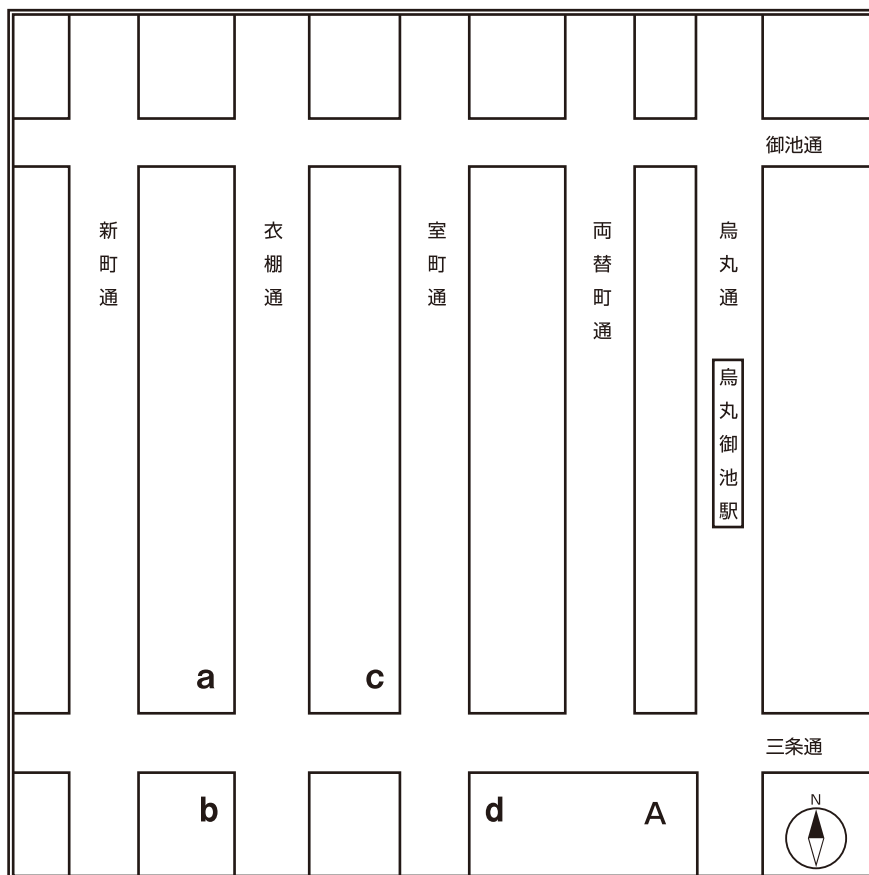
イ 赤い布の下にも当然おもちやがあると思っていたら、まるで生きているかのように生々しく動く魚がいたので驚いた。

ウ 箱の中にいた魚の赤が、箱をつつんでいた布と対照的な色だったのでより際立っており、うす気味悪く感じられた。

エ おもちやだらけの場所だと思っていたのに、生きた大きな魚が赤い布の下から現れたので、不意をつかれて驚いた。

オ 水槽の中の魚をちらっと見たそのとき、とつぜん怒ったような声が廊下の奥から聞こえてきたため、恐れを感じた。

問十二 次の図は烏丸御池駅<sup>かまろおおいけ</sup>周辺を簡単に図示したものである。



(1) A の位置にある「銀行」の地図記号として正しいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 
- イ 
- ウ 
- エ 
- オ 

(2) 〓線X「洲崎バレエ教室」はどこにあると考えられますか。図の中のa～dからもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

問十三 次の写真は〓線Y「黒主山」を写したものです。これは京都市内で七月に行われる祭りの写真でもあります。その祭りの名前を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア だんじり                   イ どんたく                   ウ 御柱祭  
エ 三社祭                   オ 祇園祭



(公益財団法人黒主山保存會HPより)



〔三〕

次の――線部について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ直しなさい。

- ① タンジョウ日をいわう。
- ② 大いに力をハツキする。
- ③ シコウ錯誤さくごする。
- ④ ゼンゴサクを練る。
- ⑤ 健気けんきなふるまい。
- ⑥ 風情ふうじやうのある庭。





